「野蛮」な「文明」

――社会小説に描かれる文明結婚――

神谷まり子

目　次

1　序 ―― 社会小説の冒頭
2　清末における「文明」
3　社会小説に描かれる「文明」
　1）　制度の受容
　2）　描かれた「野蛮」な文明結婚
　3）　文明結婚に対する社会の反発
4　結び

1　序――社会小説の冒頭

本稿で扱う社会小説とは，清朝末期から中華民国期にかけ，多く上海の新聞に連載された中国近代通俗小説のジャンルを指す。作家は科挙受験世代の知識人やジャーナリストが多く，作品も伝統的な白話小説のスタイルである章回小説の形式をとっていたため，中国文学史の上では魯迅などの新文学の作家と区別する意味で旧派，またその新文学側の作家から商業主義的な娯楽性を批判される意味で鴛鴦蝴蝶派（えんおうこちょうは）とも呼ばれた。内容は都市の腐敗を象徴するような事件やスキャンダル，巷の新風俗を語るエピソードなどの断片をつなげて長編小説の形にしたものが大部分を占める。

当時流行した主な社会小説を見ると，冒頭部分で語り手が物語の舞台となる

上海の諸悪について読者に予告し，警告を発している場面がよく見られる。例えば孫玉声著『海上繁華夢』（1903年）では，歓楽地を中心に繁華な様相を誇る上海において，「この地に遊びに来た遊興客や青年子弟の場合，ひとたび華やかな世界に身を置けばたちまち心を乱し，良くても家産を散財，ひどい時には命さえも落とす」危険性があり，「華やかな地こそ実は荊の地なのであり，溺れる者が多く罪悪も深い」（第一回）と記される。このような誘惑と罪悪に満ちた都市像は多くの社会小説に共通したテーマだが，民国期に入ってからの作品では諸悪の根源は上記のように花柳街や歓楽地に限らず，急速に発展しつつある近代都市そのものであるように思われる。海上説夢人著『歇浦潮』（1921年），包天笑著『上海春秋』（1924年），畢倚虹著『黒暗上海』（1923年）の三作品の冒頭部分を見ると，そこには辛亥革命後になってより一層腐敗が進んだ社会の姿が浮かび上がってくる。

上海は辛亥革命が起きて以来，様相が一変した。表面的には進化したようだが，内側では腐敗が一層進んだ。上は官吏や紳士，学界の人々から，下は行商人や小間使いに至るまで，みなニセの仮面をかぶり，虚偽の習わしはますますひどくなった。一部の淫蕩な女性たちや良家の放蕩息子たちは，文明自由の名の下に卑しく汚い手腕を発揮する。廉潔で恥を知る心は衰え，風紀は落ちぶれるばかり。（『歇浦潮』第一回）[1]

都市とは，文明と罪悪の集まるところである。一国の文化を窺い知るには都市を見る必要があろうし，また幾多の奇怪な悪事や変幻魍魎の類もまた都市に潜伏横行する。上海は我が国第一の都市にて，筆者は住むこと二十年，上海における各社会の情況を知った。これらを思いのままに集め，一冊の小説にまとめて『上海春秋』とし，日々新聞に掲載した。（『上海春秋』「贅言」）[2]

そもそも上海という場所は文明の空気が最も充満している所でありまして，道理から言えば内陸部よりはるかに光明に満ちているはずであります。（中略）よって拙者の『黒暗上海』という本の題名はあまりに上海を侮辱していると思われ

ましょうが，読者の皆さま，社会の表層で文明の度合いが進めば進むほど，その内部では暗黒が拡がっていることを知らねばなりませぬ。遠慮なしに言いますと，今日の上海では文明が頂点に達していると同時に暗黒もまた頂点に達しているのです。（『黒暗上海』第一回）[3]

これらの箇所では「文明」という言葉が「暗黒」「罪悪」「腐敗」などと直接結び付くものとして登場する。「文明」「進化」「自由」などの近代の新しい用語が批判的意味合いで捉えられ，これらを象徴する様々な事象が徹底的に風刺されることは，民国初期（以下「民初」という）社会小説の大きな特徴である。このことはまた，「文明」を体現する人々，例えば女学生や進歩的知識人などの人物たちが必ずと言ってもいいほど滑稽化されて描かれることと無縁ではない。以下，1910年代から20年代にかけて出版された代表的な社会小説における「文明」の描かれ方と，その代表的事象である新しい結婚の形態，文明結婚に注目し，考察してみたい。このような作業を通して，旧知識人の保守的言説という鴛鴦蝴蝶派文学につきまといがちなイメージについて再考することが可能になると考えるからである。

2　清末における「文明」

英語 civilization の訳語としての「文明」は，西洋の社会制度，生活文化を模範とする進化の到達点を示す言葉として，明治日本の文明開化期に登場した。この言葉は対義語である「野蛮」とともに清末の啓蒙思想家，梁啓超（1873-1929）によって1890年前後に中国に輸入され，その文章を通して定着していったと言われている[4]。進化の段階において最上位に位置する「文明」は，西欧に倣った近代国家形成が急務となっていた清末にあってまさしく中国が到達すべき境地であった。辛亥革命頃の上海では西洋伝来のハイカラなものに「文明」を付けて呼ぶことが流行し，新しい演劇の形態は「文明戯」，新式結婚は「文明結婚」となり，ステッキは「文明棍」，女性の新しいヘアスタイ

ルは「文明頭」，メガネは「文明鏡」と呼ばれるようになった[5]。また纏足していない女性の足は「文明脚」とも呼ばれたが，このような言い方は当時女性たちによって始められたとも言われている[6]。

「文明」は一般に「文化の開けた」や「新式」「外国製」を意味するが，清末小説のなかでの使われ方には微妙な違いが見られる。李伯元著『文明小史』(1906年) では，江南の片田舎に住む賈三兄弟，賈子猷（「假(ニセ)自由」と同音)，賈平泉（「假(ニセ)平権」)，賈葛民（「假(ニセ)革命」）にとって，明々と輝く外国製ランプは「外国人が文明的な証拠」であり，それゆえ水道や電灯の設置されている上海は彼らのあこがれの地であった（第十四回)。ここで「文明」は西洋型の近代社会や最新技術を意味するものの，同時に上っ面を追うだけの維新派や外国かぶれたちを風刺する要素をも伴っている。これに対し，呉趼人著『新石頭記』(1908年) には，清末にタイプスリップした『紅楼夢』の主人公，賈宝玉が迷いこんだ「文明国」が登場する。「文明国」は次世代型の最新科学技術を有するとともに中国旧来の礼節や道徳を遵守した理想国家であり，アメリカなどの「ニセ文明国」よりも更に上位に位置する東洋のユートピアとして描かれる。

一方，陸士諤著『新上海』(1909年) では，「文明」は対義語であるはずの「野蛮」と同義であることがはっきりと記される。上海では「野蛮な人は瞬く間に文明的となり，文明的な人もすぐに野蛮へと変わることができる。文明的な事柄を行う者は，実は野蛮な人間によって構成されているのであり，野蛮な事をする人もまた文明的な人間なのだ」(『新上海』第一回)。上海見物にやってきた「私」は，そこで売春施設で客を引く妖艶な女学生たちや事業資金を持ち逃げする学堂の校長などを目にし，「文明人であればあるほど野蛮」(第二回) と結論づける。上海を「文明」と「野蛮」が並存する地とした陸士諤の捉え方は，以後の民初社会小説で繰り返し描かれた「文明」像に近いと言える[7]。「文明」という言葉はすでに一部の清末小説において風刺的ニュアンスを伴って使用されることはあったが，陸士諤などの作家が上海を描いた作品のなかで明確に否定的イメージを伴ったものとして使用したことが，おそらく後の社会小説に見られる文明観の基礎にあったものと考えられる。

3　社会小説に描かれる「文明」

雷珠生著『海上活地獄』(1929年)では,「文明の発達した地ほど淫らな事柄が多い(「愈是文明発達的地方,桑間濮上的事情愈多」)」(第十二回)と記され,また網蛛生著『人心大変』(1928年)では,「世界は文明的であるほど風俗人心に乏しい(「世界越文明風俗人心越磽薄」)」(第三十回)と描かれる。「文明」と乱れた風俗を結びつけるような捉え方は,清末に革命宣伝劇として生まれた早期話劇の一種,文明戯に関する描写にも共通する。前述『歇浦潮』に登場する文明戯の役者は,「金を欲しがるばかりの恥知らずで,文明の看板を挙げながら野蛮な手段を弄する」(第三十二回)種類の人間である。洋服を颯爽と着こなし,「文明」「改良」などの言葉をたびたび口にするような外見とはよそに,陰では「姦淫,詐欺などしないことはない」(第十八回)。『歇浦潮』で描かれる役者たちは,観劇に来た女性たちを誘惑しては金蔓にし,「男堂子(男妓の妓楼)」なる施設を作って私腹を肥やす連中であった。このように民初の社会小説で「文明」的人物や行為は,西洋風の華やかな外見の陰に乱れた風紀や堕落した生活,不道徳な行為を抱えている場合が多く,それは乱れた男女関係や密通などの色事に関連しているケースがよく見られる。なかでも「野蛮」な「文明」を象徴する行為として,1910年代以降になって頻繁に登場するようになっていったのが,文明結婚である。

1)　制度の受容

文明結婚とは,新式結婚とも呼ばれ,清末に上海などの沿岸都市で行われるようになった西洋式結婚のことを指す。元来は中国の伝統的な結婚儀式の形をとらない,簡素化された婚姻を総称したものだが,のちには男女が自由恋愛の結果結ばれること,すなわちそれまでの親の取り決めによる婚姻(「包辦婚」)に対立するものとして理解されるようになった。『清稗類鈔』の「文明結婚」の項では,文明結婚は清末にあらわれ,新郎新婦が双方の親族,立会人,媒酌

人の前で結婚証書を取り交わして，祝辞，訓辞の後に「文明結婚歌」の披露で締め括られることが記されている[8]。このような西洋風の結婚式は，封建的な家制度を基盤とした従来の婚姻とは異なるものであり，単なる結婚の形式を超えて「自由」「平等」「民主」などの新時代の価値観を反映したものとして発展していった[9]。民国期になると，五四新文化運動の影響を受けたエリート知識人たちの間で，自由恋愛や独立した人格を主張するという観点から，時に婚礼などは一切行わず，新聞の告示広告だけで済ませる者さえいたという[10]。

『海上繁華夢』の続集，『続海上繁華夢』(1915年) の三集・第四十回では，温玉如と曲婉児という男女が遊楽場の新世界で「文明婚礼」を挙げる場面が登場する。馬車と軍楽隊に付き添われて新郎新婦が到着すると，式は立会人の祝辞や新郎の答辞，そして来賓によるオルガン演奏などによって進行し，その厳かな様子は「喧騒や無秩序とは無縁のもの」と形容される。だがこの縁談は，株式投機と賭博によって大きな借金を負った婉児の父親が，玉如の父親の友人らに窮地を救ってもらったのが縁で親同士が決めたものであり，当人達は同意こそしているものの，決して旧来の包辦婚の域を越えるものではなかった。前述の『上海春秋』に描かれる龍小姐の結婚も包辦婚であったが，「女学校で学んだことがあったため，何事も欧化されていた」彼女は文明結婚を行うことを望んだ (第十四回)。実際，初期の文明結婚では新郎が双方の親から合意を経た後，媒酌人立会いの下で初めて新婦と対面するケースが多く，恋愛の過程が完全に欠如している場合も多かった[11]。結納から結婚までの手続きを指す「六礼」(納采・問名・納吉・納徴・請期・親迎)[12] を重視する伝統婚に対し，それは時として煩雑な手続きを軽減できる経済的な結婚，もしくは西洋風の儀式に憧れる若い男女の結婚スタイルだったのであり，必ずしも自由恋愛を条件とするものではなかったのである。

初期に簡素を旨とした文明結婚は形骸化し，なかには大金を費やして豪華な式を挙げる者も出てきた。ある女優の波乱に満ちた一生を描いた社会小説，汪仲賢著『歌場冶史』(1935年) では，第二十七回の場面にヒロインの楊柳青とその恋人，范慕淹の文明結婚式が登場する。発送された招待状は数百枚，婚礼

は上海の有名庭園で行われ，祝宴は三日三晩も続くほどの盛大な婚礼であった。「髦兒戯（少女歌舞伎)」の売れっ子女優であった彼女の婚礼ともなれば，人一倍盛大なものであったとしても不思議はないが，実際には妻帯者であった范との豪華な「結婚」式という姿からは，初期のような文明結婚の理念は見られない。実際，この頃には伝統婚と同じように手続きが煩雑になり，費用がかかるようになった文明結婚が流行していることに対し，「(伝統婚と）同様に無意味であり」，「大害さえある」と非難する声も上がり初めていた[13]。

2） 描かれた「野蛮」な文明結婚

文明結婚が社会小説中に多く登場するのは，ちょうど五四新文化運動期において自由恋愛，自由結婚が提唱され，その受容層が一部の進歩的知識人から都市市民層にまで拡大し始めた，1910年代半ばから20年代にかけての流行のピーク時と重なる。だが不思議なことにこれらで描かれるのはほとんどの場合が「悪い」文明結婚であり，先に挙げた例のように好意的ないし語り手によって明確な判断が加えられない描かれ方はむしろ例外である。例えば『続海上繁華夢』では上述の温玉如と曲婉児の結婚とは対照的に，地方出身の資産家，戚祖詒と，上海のモダンガール，邢蕙春の文明結婚が登場する。邢蕙春は外見では清楚な女学生風の身なりをした美少女だが，その実態は男性を次々と誘惑しては相手を破滅させる女ペテン師であり，「行動は娼妓よりも軽薄で，心は放埒である」(初集・第六回)。金目当てであることに気が付かない戚祖詒は，多額の贈り物や礼金を贈って彼女とささやかな文明結婚式を挙げるが，それは正式な結婚手続を一切省略した，極めて異例なものだった。

> (式の当日になって祖詒が）邢宅へ到着すると，建物はひっそりとして赤い飾りもなく，門も閉じられたままだったので，すっかり驚いてしまった。門の外に二台の馬車が停まっていたのを見て，図仲と懐策が先に着いていることがわかった。小陳に門を開けに遣らせようと思っていたちょうどその時，ギィと音がし，懐策がドアを開けて出てきた。祖詒の車の所までやってくると，彼は耳元で言っ

た。「実は邢家では今日のためにいろいろと準備をしていたのですが，一家の長老が他人に知られてとやかく言われたらお互いの家にとっても都合が悪い，と言って反対したのです。だからやむなくあなたにはちょっと我慢をしてもらうことになりましたが，どうか悪く思わないで下さいね，とあちらのお母さんが言っていました」。祖詒は頷き，この説明にすっかり納得してしまった。馬車から降り家の中に入ると，懐策はドアを閉めさせてから彼を客間に案内し，腰かけさせた。すると図仲は，「奥様どうぞ，祖詒の挨拶をお受けください」と呼んだ。祖詒は洋服を着ていたが，ここで中国式の叩頭を丁重に行ってから夫人をお母様と呼ぶと，夫人は彼を婿どの，と呼んで返礼とした。次に懐策は上の階から娘を呼び，文明結婚の礼をさせた。（中略）図仲と懐策は祖詒を新婚夫婦の寝室に案内したが，部屋にはあらかじめ酒器が用意してあった。祖詒が上座，蕙春は下座に座り，図仲と懐策がおめでとうございます，とまず一献を捧げてから退室した。これにて祖詒が心待ちにしていた婚礼は滞りなく終了した。このようなないものだらけの結婚式は，全く前代未聞と言えるだろう。（『続海上繁華夢』初集・第十六回）

中国の伝統的な婚礼では，花嫁を載せた籠がにぎやかな楽隊の行列とともに街中を練り歩きながら新郎の家に到着するのが通例であり，婚礼は朱色の字で華やかに飾り付けられた室内で大勢の親族や知人を交えて賑やかに執り行われるのが一般である。だが上記の婚礼では，「ひっそりとして赤い飾りもな」いばかりか，邢家側に買収されている二人の悪党，図仲と懐策を立会人としてごく簡単な儀式が行われたに過ぎない。当事者だけで人目を避けるようにして行われた文明結婚式は，実は邢蕙春が戚祖詒の財産をあらかた自分の懐に入れてしまうと，結婚証書がないことを理由に結婚の事実さえも否定して彼を家から追い出すための，あらかじめ仕組まれた罠なのだった。ここで文明結婚は，従来の婚姻手続きを省略できるがゆえに結婚詐欺に悪用されたのである。戚祖詒は懲りずに邢蕙春と別れた後に妓女の惺惺と再び文明結婚をするが，その場面は「愛情，自由，団体，極点などの新名詞をふんだんに盛り込んだ」荒唐無稽な結婚証書を中心とした，完全なコメディに仕上げられている（三集・四～五

回)。この作品で文明結婚は，上海の諸事情に疎い地方出身者の戚祖詒が放蕩の限りを尽くした挙句，全資産を失って路頭で無惨な最期を遂げるという零落物語における，ひとつの大きな鍵になっている。

上記のように文明結婚が詐欺事件に発展するケースは，『歇浦潮』にも見られる。第四十二回，甄弁護士事務所に持ち込まれた案件を描写した部分では，語り手によって「自由」「文明」などの言葉が執拗なまでに用いられ，その口調は徹底してシニカルである。

> 原告は楊といい，地元の有力者だった。娘の一人が数年前にある新式の女学堂に入ったが，おりしも男女平等，階級打破，自由学説が一世を風靡した時代であった。娘は幾人かの文明女子たちと自由主義を実行し，こともあろうに方向を誤り，目的を違え，文明の装いをした青年と知り合いになって，密かに彼に野蛮な手段を弄されることになった。当時の婦女界では文明野蛮という二語は知ってはいるものの，何を文明と言い，何を野蛮と言うかまでは誰も知らない。楊女史は心中これこそ真の自由だと思い込み，彼との間の愛情も誠に深いものだったので，相手が文明結婚をしたいと言い，結婚式の指輪用に金の指輪を幾つか欲しいと言い出した時には，全く信じて疑わなかった。そして青年は指輪を受け取ったが最後，その後は行方をくらましてしまったのだった。(『歇浦潮』第四十二回)

ここでは文明結婚という名の下に公然と結婚詐欺が行われている状況が痛烈に風刺されている。興味深いのは，詐欺に遭った娘は被害者であるはずなのに，語り手の筆にかかると新思想にかぶれて自由を取り違えた彼女の方に否があるといわんばかりな点である。この場面からは自由恋愛による男女の結びつきという，理想的結婚であるはずの文明結婚の姿は存在しない。その代わりにあるのは以下の例にもあるように，自由になりすぎた恋愛とその先にある軽はずみな結婚に対する，語り手の冷ややかな視線と戯画化された近代恋愛の姿である。

皆さんもご存知のとおり，我が国で西学が盛んとなって以来，男女間の境は自由という二字のためにきれいさっぱり取り除かれました。古来，女子は男子を見ると恥ずかしがって俯いてばかりいたという悪習がありましたが，自分も相手も同じ人間，あばた面や疥癬頭で男性に笑われるのを怖がっているわけではあるまいし，どうして恥ずかしがることがありましょうか。改革以来この悪習は無くなり，今や男子は飽きるまで女子を眺めるも良し，女子も男子を思う存分鑑賞するのも良しと相成りました。これは痛快なことだと言えます。しかしこれは一般の男女までで，学界における一部の人々は，文明の思想が大量に注入されたために，自由の進化する速度も当然のごとく加速し，往々にして見知らぬ男女が，一度あいさつが終わるやいなや話に花を咲かせ，人々の眼もお構いなしに場合によっては半年か一年で小文明の種をこしらえてしまう，という有様。これはまさに物極まれば必ず反する，という事であります。文明も行き過ぎれば，幾らか野蛮な性質も現れてくるというもので，これこそ物の道理が巡る，自然の妙とでも言えましょうか。(『歇浦潮』第十四回)

「往々にして見知らぬ男女が，一度あいさつが終わるやいなや話に花を咲かせ，人々の眼もお構いなしに場合によっては半年か一年で小文明の種をこしらえてしまう」行為は，語り手によれば「西学が盛んとなって以来，男女間の境は自由という二字のためにきれいさっぱり取り除かれ」たことに由来する。つまり，先に引用した場面と同様，非難の矛先が向けられる「自由」とは，異性間の自由な交際を許し，女性を封建的な家制度から解放するはずの女権思想を暗示しているものと考えられる。清末以来，女性解放運動に端を発した女学堂の設立が相次いだことによって中国に初めて女学生が誕生したが，多くの社会小説において女学堂や女性解放思想は淫蕩の大義名分として終始強烈な揶揄風刺の対象である。このことは，たびたび女権運動の女性リーダーたちが次のような「主張」を行い，実践する人物として登場する点にも表れている。「男子は女子を家に置いて一日中これを弄び，彼女を一生実家に帰らせないでいられるのだから，私たち女性だって男を家に囲い，終日楽しんで彼を家に帰らせないことがあってもいいはずです。これこそ男女平等と言えるのじゃないかし

ら」(許嘯天著『上海風月』1929年，第十八回)[14]。

女権思想に裏打ちされた自由な交際という習慣は，男女の厳格な分離を重んじる中国古来の慣習を一変させた一方で，新たな「問題」をも生みだした。『歇浦潮』では当世風の男女による自由すぎる男女関係はきまって「野蛮な性質」を持つ「文明」の文脈で語られるが，このような描かれ方は民初社会小説ではほとんど常套手段ともなっている。李涵秋著『広陵潮』(1919年)では，不倫関係の男女が密会に使用した「文明旅館」という名の旅館が，実は地元では有名な「野鴛鴦待合所(野合待合所)」(第九十四回)と記される。また女学堂の女校長，明似珠が主人公の雲麟を誘惑しようとする場面では，「今日の文明女子の間ではこのようなことを文明と呼ぶのであろう」，「(妓女出身の女性でさえも)彼女ほど淫蕩ではない」(第五十二回)との語り手の言葉が記される。一方，平襟亜著『人海潮』(1927年)に登場する愛媽女学校は，地方出身の学生にとっては劣悪な環境にある「文明監獄」(第八回)であり，また女学生たちが陰で文明劇役者と気ままな自由恋愛に明け暮れる「淌白養成所(淫売養成所)」(第二十八回)とも呼ばれていた。これらの作品において「文明」とは野合や淫蕩の異名であり，それは往々にして新思想の影響を受けた若い男女による乱れた男女関係や婚姻外の情事，売春行為，結婚詐欺などとして完全に戯画化されて描かれている。

3)　文明結婚に対する社会の反発

風俗の堕落を象徴するような文明結婚像は，当時社会小説のなかでしか見られなかったわけではない。1917年頃の探偵小説「文明結婚」では，男女が入り混じって座り，互いにふざけあったりするような文明結婚の会場がこの種の盗難事件が起こりやすい場として登場する[15]。清末小説では『自由結婚』(東亜寄生著，1910年)[16]などのように自由恋愛を追求する男女の悲劇を描いたものも多く見られた一方で，『立憲小説　未来世界』(春驃著，1907年)のように文明結婚によって一度はある男性と結婚した女学生，趙素華の自由奔放な恋愛を描き，「現在の女学生は表面的には非常に文明的だがその内実はひどく腐敗し

ている」と行き過ぎた自由恋愛を批判したものもあった[17]。

「文明」を自由すぎる男女関係と結びつけて批判的に論じたものでは，1921年の『新申報』に掲載された「上海人之文明」という一文がある。ここでは外国租界の林立する「文明の地」上海の娯楽施設で男女が入り混じって座る光景について言及し，巷では色恋沙汰に起因する決闘事件も起こっていることを受け，「まさに文明も極まったと言えるが，道理を理解しない老先生はやはり野蛮に旧きを守り，頑迷に変えないほうが世の中も平穏無事だと思う」と述べる(多節「上海人之文明」『新申報』1921年6月21日)。風紀の乱れを嘆き，中国の伝統的な男女観を取り戻すべきだと主張するこのような意見は，守旧派からの反応として当然予想できるものだが，自由恋愛や離婚の増加に対する反発は決して一部の守旧派だけではなく，辛亥革命前後から各地の有力メディアに一般から頻繁に寄せられたものであった[18]。やや時代は下るが，贅沢な生活に憧れて売春を行う女学生たちがいることを嘆き，これらの現象を都市における進んだ「文明」と関連づけて捉える例は，ジャーナリストの郁慕俠による次のような記述にも見られる。「文明が進歩し，都市が繁華になればなるほど，女子の人格と貞操問題は救いようのない深みにまで堕落してしまう」(「女学生的醜業」『上海鱗爪』，1933-35年[19])。

次に文明結婚に対する人々のアンビバレントな姿勢を示す一例として，清末の娯楽新聞に掲載された記事を見てみたい。『続海上繁華夢』が連載されていた画報『図画日報』(1909-1910年)の絵入りコラム「上海社会之現象」では，巷の最新事情としてほぼ同時期に文明結婚に関する二つの記事が掲載された。一つは「文明結婚之簡便」というもので，庭園の西園で行われた文明結婚を取材し，一部の「新学界人」たちが煩雑な伝統婚を避けて「文明結婚」を行う様子が紹介されている[20]。この記事で文明結婚は簡便で整然とした結婚式として好意的に描かれているのに対し，後日の同コラムには「野鴛鴦借名文明結婚之可笑(野合男女が文明結婚の名を借りて式を挙げた滑稽談)」という記事が掲載されている[21]。タイトルからも窺えるとおり，それは「色恋に溺れた男女が密かに知り合った後，人々に野合夫婦と嘲笑されるのを恐れたあまり」ニセの文明

結婚を挙げたというもので，筆者は結婚証書の署名に「賈文明（ニセ文明)」「甄冶鴛（本当は野合夫婦)」，証人名に「胡礼」「胡図」（大バカ者）と皮肉を込めて記した。この二枚の絵はオルガンや付添い人の有無など若干の違いを除き，ともに万国旗で飾られた講堂の中央に証書を読み上げる人物と新郎新婦が立ち，それを左右に並んだ来賓が取り囲むという類似した構図をとっている。一つの構図を描いたネガとポジのような二枚の絵は，おそらく当時の人々が文明結婚に対し，進歩的な新知識人たちの新しい結婚の形態として一方では憧れに似た眼差しで受けとめながらも，他方ではその急激な流行に対しては懐疑的な気持ちも差し挟んでいたことを示していると言えるだろう。同画報では，他にも町のゴシップとして文明結婚と称して式を挙げずに同棲する男女について報道した記事も見られる（「亦為文明結婚」[22])。文明結婚を題材としていち早く取り入れた『図画日報』を五四新文化運動期の「恋愛神聖」ディスコースにつながる開明的なメディアとの流れで捉える見方もある一方で[23]，上記に示したように全ての「新式」恋愛を手放しで礼賛するものではなかった。それは通俗メディアとしての性質上，スキャンダルやゴシップを好む都市の一般市民の広い関心に沿うものでなければならなかったという理由によるものと考えられる。

「文明」的結婚の基礎としての自由恋愛は，同時期の台湾などでも「男女の姦通」と批判される流れがあったが[24]，上海で生まれた様々な言説はこの問題が新知識人対保守的な旧世代知識人という単純な二項対立で説明しきれるものではないということを示している。上海一帯の民間歌謡を集めた胡祖徳著『滬諺外編』には，文明結婚を皮肉った「嘲結婚」という歌がある。「可笑しいかな文明女子が学堂に入学すれば，恋人を選ぶのもよりどりみどり／媒酌人や酒宴も必要なく，父母にも秘密裏に事を運ぶ（可笑文明女子進学堂，自由択配有情郎。不用媒人排酒缸，秘密不向父母商。)」[25]。さらに同著「結婚歌」では，文明結婚などの新式結婚が主流となった時代において，従来の結婚手続きをとらずに同棲生活を始めたカップルのうち，男性が女性の全財産をもって行方をくらましてしまったという「密通事件」を取り上げた。「これに比べれば貧乏人が幼

い女児を嫁にとり，真面目に添い寝しているほうがどれだけマシなことでしょう／蠟燭の火の下で祖先に誓いをたてれば，夫婦共白髪まで代々子孫も残せます（不如窮苦人家養媳婦，老老実実冷塌餅。長九蜡燭拜家堂，白頭偕老伝子孫。）」と，昔ながらの結婚の習慣が賞讃されている[26]。昔ながらの正式な婚礼を挙げずに行われた「結婚」がいずれか一方による失踪や窃盗などの犯罪に帰結する例は，社会小説中に繰り返し描かれてきたものであり，このようなイメージがメディアの枠を越えて広く共有されていたことを物語っている。文明結婚や自由恋愛に対する反発や風刺は，1910年代から20年代にかけて恋愛をめぐる論議が盛んになった時期において上記のような通俗メディアを中心に見られるものだったのであり，社会小説はこの種の論調をその都市風刺劇に織り込んでいたとも考えられるのである。

4　結　び

新文学において近代の恋愛は理想化，神聖化されて描かれた，と考察したのは張競『近代中国と「恋愛」の発見』だが，これとは対象的に民初社会小説においては往々にして滑稽化，戯画化されて描かれていた[27]。そのような意味で社会小説の描く「恋愛」は，まさしく五四式恋愛のパロディ版だったと言える。社会小説の書き手たちが保守的な「旧派」であったために作品の中で女学生や自由恋愛などが懐疑の対象となり，批判されたという考え方があるが[28]，このような早急な答えを出すよりはむしろ当時の通俗小説を近代メディア全体の問題として再考する必要があると思われる。社会小説で見られた性的に奔放な女学生イメージは，日本明治期において新聞に女学生や進んだ女性たちをめぐるスキャンダラスな報道が好んで取り上げられたことで，積極的で性的に奔放という新聞小説の「女学生神話」が誕生したという経緯と類似点があると考えられる[29]。また，19世紀フランスの風刺画家，ドーミエや明治日本の風刺漫画など，大衆ジャーナリズムが発達していく過程において「ブルー・ストッキング（青鞜）」を代表とする新しい女性たちの行動は常に好奇と揶揄の対象で

あった[30]。この種のイメージは社会におけるなんらかの現象を反映していたことは間違いないが，ここで重要だと思われるのは奔放な女学生や自由恋愛に関連する事象が全て「事実」であったかということではなく，むしろそれらが繰り返し様々なメディア上で語られ，飽きもせず読者によって消費されていたという「事実」だろう。密通と犯罪の物語という，新事象をめぐるスキャンダラスでセンセーショナルな内容のほうが，ごくありふれた日常の物語よりはるかに刺激的であり，様々な年代や考え方を持つ人々から構成される読者の関心を集めるものだったとしてもおかしくはない。ペリー・リンクの言うように，西洋型の新しい制度や生活風習を表面では積極的に受け入れながらも，その奥では依然古くからの慣習や伝統的な考え方を保持していたと思われる都市中間層の読者にとって，当時の通俗小説は彼らが最も心理的に共感できるものだったと考えられる[31]。

海上説夢人は『歇浦潮』の続編，『新歇浦潮』(1925年)のなかで，礼金に目がくらんだ両親によって結婚を強いられた女性が夫と無理心中するという事件を描き，旧式婚姻によってもたらされた悲劇を「金銭万悪」として批判した(第二十回)。先の作品で近代恋愛を否定的に描いた作者ではあったが，続編では自由恋愛を追求する女学生たちを描いてもいるように，通俗小説の作家たちが必ずしも新しい恋愛を否定し，旧来の婚姻形態を支持していたとは言いきれない[32]。むしろ社会小説が時代を経て様々な結婚像や恋愛像を反映しながらも，常に風刺の矛先を向けていたのは私利私欲にまみれた近代人の姿であり，描かれていた「野蛮」な「文明」像には社会小説の最大テーマである近代都市批判，すなわち人心の荒廃と拝金主義への批判が隠されていた。このように考えれば，民初社会小説は鋭い時代感覚に彩られた，一つの文明批判の書として読むこともできるのである。

注

1) 海上説夢人(朱瘦菊)著『歇浦潮』，『新申報』1916～21年連載，1921年出版(全百回)。

2）包天笑著『上海春秋』，『新申報』1922～23年連載，1924年出版（全八十回）。
3）清波（畢倚虹）著『黒暗上海』，『時報』1923年6月1日から連載，出版年等不詳。
4）石川禎浩「梁啓超と文明の視座」（狭間直樹編『共同研究 梁啓超』所収，みすず書房，1999年）。
5）鄭逸梅，徐卓呆編著『上海旧話』上海文化出版社，1986年，104頁。
6）包天笑著『釧影楼回憶録』山西古籍出版社，1999年，519頁。
7）天贅生著『商界現形記』（1911年）の冒頭においても上海は「文明又蛮野之肇始（文明と野蛮の発祥地）」と記される（天贅生著『商界現形記』上海古籍出版社，1991年，1頁）。なお田若虹は（雲間）天贅生を陸士諤の筆名とする（田若虹著『陸士諤研究』岳麓書社，2002年，331頁）。
8）徐可編『清稗類鈔』（四）影印版，台湾商務印書館，1966年。
9）陳伯海主編『上海文化通史』上海文芸出版社，2001年，370-371頁。
10）中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年』青木書店，2004年，79～82頁。
11）張競著『恋の中国文明史』ちくま学芸文庫，1997年，289頁。
12）「六礼」とは，①納采：男の家の意向を受けた媒酌人が女の家に求婚　②問名：男の家が女の家に女子の生年月日を問い合わせる　③納吉：問名をもとに男の家の宗廟で婚姻の吉凶を占う　④納徴：男の家が婚約の徴として女の家に金品を送る　⑤請期：男の家が女の家に結婚の日を知らせる　⑥親迎：黄昏の時刻に新郎が新婦の家へ迎えに行く，の六要素から構成される（関西中国女性史研究会編『中国女性史入門』人文書院，2005年，16頁）。
13）羅敦偉著「中国之婚姻問題」大東書局，1931年，55頁。
14）女子が男性の「妾」を持つ，又は未婚のまま男性ときままな恋愛を楽しむことを男女同権の実践と見なすような主張は，網蛛生著『人海潮』（1927年）の女性作家，秦愛心や，不肖生著『留東外史』（1916年）に登場する女性革命家，胡女士にも共通して見られる。
15）「文明結婚」（兪天憤著『中国新偵探案』所収，小説叢報社，1917年再版）。
16）海上自由生（東亜寄生）著『自由結婚』（一題『情天刼』）広東小説社，（1910年），東京都立中央図書館実藤文庫所蔵。なお『新編増補清末民初小説目録』（樽本照雄編，斎魯書社，2002年）は同著一題を『文明自由結婚』とする。また直接には恋愛を扱ったものではないが『自由結婚』（万古恨著，1903年）と題された政治小説もある（『中国近代小説大系』所収，百花洲文芸出版社，1991年）。
17）「立憲小説　未来世界」『月月小説』第一年第十号（1907年）より連載，全26回。
18）左玉河「由“文明結婚”到“集団婚礼”――従婚姻儀式看民国婚俗的変化」（薛君度，劉志琴主編『近代中国社会生活与観念変遷』所収，中国社会科学出版社，2001年）。
19）郁慕侠著『上海鱗爪』上海書店出版社，1998年，21頁。

20）『図画日報』第四十七号第七頁（『図画日報』影印版，上海古籍出版社，1999年，1-559）。
21）『図画日報』第六十七号第七頁（『図画日報』前掲，2-199）。
22）『図画日報』第三百九十号第十二頁（『図画日報』前掲，8-480）。
23）坂元ひろ子著『中国民族主義の神話――人種・身体・ジェンダー』岩波書店，2004年，90頁。
24）洪郁如著『近代台湾女性史』勁草書房，2001年，205～208頁。
25）胡祖德著『滬諺外編』上海古籍出版社，1989年，46頁。
26）『滬諺外編』前掲，205-206頁。
27）張競氏は『近代中国と「恋愛」の発見』（岩波書店，1995年）のなかで，鴛鴦蝴蝶派の描いた恋愛ものとして「柔郷苦海録」という作品を挙げている。同著ではこの作品の作者名を周瘦鵑としているが，実際には朱瘦菊の誤りであり，朱瘦菊は本論でもたびたび取り挙げた『歇浦潮』の作者，海上説夢人であった。結果的に朱瘦菊の描く恋愛を「アンチ恋愛」「恋愛のパロディー」（125頁）としたのは適当だと思われるが，それに対し同氏が混同した周瘦鵑は，文芸雑誌『紫羅蘭』などの編輯でも有名な作家であり，ロマンティック・ラブを描いた言情小説（恋愛小説）を最も得意としていた。
28）佘小傑著『中国現代社会言情小説研究』中国社会科学出版社，2004年，215頁。
29）平石典子「「女学生神話」の誕生を巡って」『人文論叢』三重大学，第18号，2001年。
30）「嘲笑された女性たち」（清水勲著『漫画が語る明治』所収，講談社，2005年）。
31）Perry Link, *Mandarin Ducks and Butterflies : Popular Fiction in Early Twentieth-Century Chinese Cities*, University of California Press, 1981, 20p.
32）鴛鴦蝴蝶派の作家たちのなかでも包天笑のように恋愛結婚を理想としていたと言われている例や（范伯群「鴛鴦胡蝶派の再評価について――徐枕亜，包天笑，周瘦鵑の文学活動を中心に」大阪市立大学中国学会『中國學志』蠱号，2003年），周瘦鵑のように自らの新式結婚を小説化してさえいた例も見られる（包天笑著『釧影楼回憶録』前掲，488頁）。

本稿で取り上げた社会小説の使用テキスト：

『海上繁華夢（附続夢）』海上漱石生著，上海古籍出版社，1991年
『歇浦潮』海上説夢人著，上海古籍出版社，1991年
『新歇浦潮』海上説夢人著，湖南文芸出版社，1998年
『上海春秋』包天笑著，上海古籍出版社，1991年
『黒暗上海』清波（畢倚虹）著『時報』1923年6月1日
『新上海』陸士諤著，上海古籍出版社，1997年
『歌場冶史』汪仲賢著，春風文芸出版社，1997年

『広陵潮』李涵秋著，湖南文芸出版社，1998年
『人海潮』網蛛生著，湖南文芸出版社，1998年
『海上活地獄』雷珠生著，春風文芸出版社，1997年
『人心大変』網蛛生著，中央書店，1928年
『上海風月』許嘯天著，江蘇廣陵古籍刻印社，1998年
『留東外史』不肖生著，中国華僑出版社，1997年